



ギター教授45周年 & 古希記念 川竹道夫ギターリサイタル

11月25日(日)

午後2時 ※開場は午後1時30分

会場：北島町立図書館3階 創世ホール

出演：川竹道夫

賛助出演：徳永真一郎・浅田侑子

入場料：前売/一般 2,000円 学生 1,500円

当日/一般 2,500円 学生 2,000円

主催：徳島ギター協会(川竹 ☎088-631-7893)

演奏予定曲目

- ・「組曲」(H.パーセル)
- ・「幻想曲第2番」(F.ソル)
- ・「南のソナチネ」(M.ボンセ) 他

とくしま混声合唱団 ハートフルコンサート

11月24日(土)

午後2時 ※開場は午後1時30分

会場：北島町立図書館2階 ギャラリースペース 入場無料

主催：徳島混声合唱団

演奏予定曲目：「月の砂漠-証城寺の狸囃子-みかんの花咲く丘-汽車のうた-どんぐりころころ-里の秋-赤とんぼ」、合唱曲「みやこわすれ」から「薔薇のかおりの夕ぐれ」 他

■秋にぴったりなお馴染みの曲を、豊かなハーモニーでお届けします。

徳島クリエイターズマーケット 28

12月1日(土)・2日(日)

午前10時～午後5時 ※最終日は午後4時まで

会場：北島町立図書館2階 ギャラリースペース 入場無料

主催：徳島クリエイターズマーケット事務局

(川久保 ☎080-3162-2234)

凄腕の「モノづくり人」が集う、徳島県内最大級のハンドメイドマーケット、北島町では23回目の開催になります。■脱力系癒しキャラ「ししゃもねこ」の生みの親として知られる本町在住の造形作家・川久保貴美子さんの呼びかけで2008年にスタートしたこの催し、今回でなんと10周年を迎えます。■お気に入りの一品が見つかるかも!?皆様、ご注目ください。

故 竹内 晃子 遺作展

12月8日(土)・9日(日)

午前10時～午後6時 ※最終日は午後5時まで

会場：北島町立図書館2階 ギャラリースペース 入場無料

主催：竹内良子(☎080-2995-6663)

■ろうけつ染め、型染、草木染、藍染による着物、反物、羽織、タペストリーなど、竹内晃子さんが遺した作品群を展示します。



■これならばできるというので、「怪奇大作戦」のプロデューサー、橋本洋二さんは「この方向で本を作って欲しい」と。シナリオ作家たちにも「このラインが必要なんだ」と伝えるわけです。

■もう1本の「死神の子守歌」というのは、広島で胎児だったときに原爆で母親が被災した、つまり胎内被曝した少女がやがて歌手になって「死神の子守歌」という人気の歌を歌うわけですが、いわゆる難病で非常に苦しむわけですね。その彼女を治療させたいがために、草野大吾が演じるお兄さんが、冷凍光線による人体実験を行なうわけです。妹の命が危ない、時間が無い、と言って人体実験を繰り返す。

■共に戦争の影を引きずる物語、それは橋本プロデューサーにとっては、「怪奇大作戦」の方向付けにおいて、これは非常に重要なものだったわけです。金城哲夫も、科学犯罪だけではなくて現代の社会悪みたいなことは考えたわけですが、佐々木さんの作品の方向付けが「怪奇大作戦」のシリーズの骨格になったわけですね。

■それでも実相寺昭雄さんは、京都の「風」の体験もあって、「よし本気でやるぞ」と。通常「ウルトラマン」などの場合、特撮班、本編班という具合に二班に分かれて撮影するわけです。怪獣やウルトラマンを撮る部隊、人間を撮る部隊に分かれるんですね。

■一方、「怪奇大作戦」というのは人間の物語ですから、2班編成はほらない、全部1班でよいと。一つのチームで撮るんだ、と。特撮は数日撮りますけれども、特撮セットはないし、合成主体のカット数少ないですから、それで行こうと。1班ですから実相寺は本気になるんですね。

■そしてこのときは、「ウルトラQ」から「ウルトラセブン」まで、マンやセブン、怪獣などのデザインをやっていた成田亨（なりた・とおる）さんが辞めていたものから、26歳だった池谷仙克（いけや・のりよし）さんという美術デザイナーが（この人は特撮のデザイナーだったんですけれども）抜擢されて、「お前がやるんだ」と。「人間のセット作ったの、初めてだった」と池谷さん、言っていました（笑）。

■「恐怖の電話」というのは、電話をしている桜井浩子さんのお父さんが燃え上がっちゃうもんですから、実際にそこに火を放ってバーッと燃えあがるわけですね。だからベラベラのセットを作るとやばいというので、池谷さんも人間のセットは初めてだったこともあって、映らない所も含めて、丸ごと四面の桜井浩子さんの家のセットを作ってしまう。居間があって、階段があって、電話が置いてあるという、家のセットを作ったんですね。

■実相寺さんは、どの角度からとっても大丈夫なもんですから「よし、ここは長回しで行こう。手持ちカメラで長回しで行くぞ」と。最初は実は移動車を引いたり押したりをやるつもりだったんですが、家の中は狭いから、手持ちカメラで捜査陣のあわただしい雰囲気撮ろうということになるわけです。

■そこに岸田森（きしだ・しん）という役者が出てくるわけですが、実相寺監督の演出設計は、「岸田森の耳のアップから行こう」と。岸田さんが「この

犯罪のトリックは何だろうか」と考えているわけですね。科学者ですから。

■すると、カメラは岸田森の耳から顔のアップになる。カメラが引いて、顔が映ったあたりで、耳が神経質そうにぴくぴくと動く。そしてその横に松山省二や原保美がいる。そういう内容を実相寺さんが打ち合わせの時に言うわけですね。岸田森が「え、耳を動かすんですか？」と言うと、実相寺さんは、キッと岸田さんの方を向いて「君は役者なのに、耳も動かせないのかー」と答えたらしい（笑）。岸田さんはエライ監督についてしまったと驚いた。実相寺さんのことは助監督の頃から知ってはいたんですけど。

■ずーっとあとになって、ヘラルドの「歌麿、夢と知りせば」を撮るときに、岸田さんが実相寺さんに「最初のときのこと、覚えてます？『怪奇大作戦』の撮影で、耳を動かさせて言われたんですよ」と言ったら、実相寺さんは「そんなこと言ったかなあ」（笑）。岸田さんは「言いましたよ」と（笑）。恐らく監督が役者さんに対して、ちょっと驚かすというか、俺は普通じゃないぞとアピールするために役者さんに見せたポーズだったんでしょうけど、岸田さんもやりがいがあった。特に岸田さんは、もう一本、「恐怖の電話」と一緒に撮った「死神の子守歌」では、同じ劇団仲間だった草野大吾さん演じる犯人に対して、1対1の二人芝居でSRI側の人間として丁々発止のやり取りをするんですね。

■「恐怖の電話」でもう一例、どれぐらい本気だったか。犯人は、電話で次々仲間を殺していくわけですね。で、電話の基地局で電話の通信網がカチャカチャとつながってゆく描写があり、SRIは地下のマンホールの電話線を追ってゆく。それらを調べて、どこから電話をかけているのか突き止めてゆくと、四畳半の小さなアパートの一室に、扉を開けると電話だけあるんですよ。要するに、犯人は部屋だけ借りてそこから電話をしていた。それを徹底したロケ撮影で撮っていく。

■病院のベッドでヒロインに電話を渡す勝呂誉（すぐろ・ほまれ）さんのシーンの撮影が始まった。それで池谷さん、美術監督ですから、この撮影はすぐ終わるだろうからと思って、ほかのロケ地を見に行っただけですね。

■で、しばらくして戻ってきたら、まだ同じ場面を撮っていた（笑）。36テイク目をそこで撮っていたわけですね。つまり36回でもOKが出なかった。それぐらい「恐怖の電話」というのは入魂の作品だったわけですね。

■それで橋本さんは、実相寺さんがそういう体制で行くということを書きましたから、ひょっとしたら撮影に時間がかかるかも知れないと。それで、もう1本、上原正三さん脚本の「壁ぬけ男」という、霧を出してそれを科学トリックに使う壁の中に消えてゆく犯罪者の話を飯島敏宏監督に撮らせた。飯島さん早いんですから。悩まない人なんで、パッパ、パッパ撮ってゆきますから。実相寺さんには「飯島さんが『壁ぬけ男』撮ってるから、お前はゆっくりでもいいよ。しっかり作ってくれ」と。

■例えば「死神の子守歌」でも、最後に夜の公園で草野大吾の犯人が警察隊に捕まりながら、妹に「麻生博士に頼め！」と叫んで殴られる、要するに科学研究をつないでお前の体を助けてもらえ、と叫びながら警官隊に殴られるシークエンスがあります。

■当然、夜間撮影ですけど、人間が映らないとまずいじゃないですか。スタッフも気を使って、草野大吾がはっきり分かるように撮っていたわけですね。ところが、シナリオは砂川闘争に行っていた佐々木守ですし、実相寺さんもデモは見ていますから、「おかし」と。

■「警察官はこんな殴り方じゃない、撮り直しだー」と言って、本隊は別の場所に行ってるのですね、カメラマンの稲垣涌三（いながき・ようぞう）さんと助監督の山本正孝さんと実相寺監督だけは、石神井（しゃくじい）公園

に夜間、ほんの数基のライトを持ち込んで、再撮影してるんですね。それは『キネマ旬報』が当時、子ども番組かと思って、見て驚いていたら脚本が佐々木守で監督が実相寺昭雄だったんで、ああそれだと思ったと、書いた。それぐらい、入魂の撮影体制をやっていた。

■実は「怪奇大作戦」というのは、後半に《京都編》と言われる2本の作品があって、実相寺さんは、前年「風」で京都に行っていますから、当然ここで撮りたいというロケ地を見つけてあって、「これは撮りたいですね」とロケハンまでやるんですね。ところが「怪奇大作戦」はお金がなくて円谷プロ内部では「タイアップ大作戦」と言われたぐらい、色んな所とタイアップして何とか作っていた作品なわけです。そして予算もスケジュールもぎりぎりになって、円谷プロとしてはあきらめざるを得ない、と。ところが橋本洋二さんが「台本が惜しい。これは、やはり作ろう」と。「円谷ができないんだしたら、『風』を作ってくれた京都映画に外注に出そう」と。

■それで実相寺監督と美術監督の池谷さんと撮影の稲垣さんと助監督の山本さんと合成の中野稔さんと特撮演出の大木淳さん、6人だけ送り出す。あとは要するに京都映画のスタッフで頼む、という形で橋本さんが大英断をして、佐々木守脚本の「京都買います」と石堂淑郎脚本の「呪いの壺」の2本が作られることになったんですね。

■この2本は同時に撮影に入るわけですが、池谷さんが実相寺さんと相談したときに、「『呪いの壺』の方は、オールセットで行こう」と。「呪いの壺」をご覧になった方はお分かりになると思いますが、市井（いちい）商会という偽の壺を売っている古物商の家は、店の入り口があって、階段があって、居間があって、奥に大事な壺を並べてある部屋があるのは、通し撮影ができるように作り上げたセットなんですね。あるいは、花ノ本寿（はなのもと・ことぶき）さん演じた日野統三の実家、代々、市井商会のために偽物の壺を作っている家の間取りも、全て飾りこんだセットです。それは京都の時代劇を作っているスタッフですから、いくらでもやりようがあるんですね。

■対抗して「京都買います」は、オール・ロケーション。最初から京都のここぞと狙ったところは全部撮っている。平等院とか、三十三間堂とか、銀閣寺とか。斎藤チヤ子さんが演じる美也子さんが助手を務める藤森教授の研究室は、京都映画の時代劇の俳優さんたちが着替えに使う、すごくひなびた部屋一役者さんの控室一を飾り替えて、大学の研究室に見立てて撮影して、あとは全部ロケーションで撮っています。

■「京都買います」で池谷さんが感心したのは、特に岸田森の彷徨うシーン。斎藤チヤ子さん演じる美也子さんが犯人の一味だと分かって、藤森教授が捕まって、「仏像以外のものを信じた私が馬鹿だったんです」という趣旨のことを言って去って行った後に、何かを求めて岸田森さん演じる牧史郎が京都の寺々を散策するシーンがあるんですね。ここは実相寺さんは決めてあって、一か所ワンカットしか撮らない。

■階段をスキップしながら上がってゆく岸田森、銀閣寺の横に座っている、別の寺でたたずんでいる、あるいは何かを食べている岸田森。池谷さんたちがその撮影にかかったときに、ここは正午に撮る、ここは午後2時に撮る、あるいはここは夕方の方が日が沈もうとしているときに撮る、そういうメモを監督から渡されるんですね。で、池谷さんが実相寺監督に「これは何ですか」と聞くと「この寺はねー、午後3時に撮るといいんだよ、ここもねー、夕方になると木漏れ日が入っていいんだよ」と。実は時間設定が撮影時に全部組んであったんですね。「京都買います」は。完成品は25分ですけど、全部で50分あったそうです。（次号に続く／採録・文責＝小西昌幸）